

展覧会のお知らせ

■常設展示

「小川原脩のラダック」

1983年、小川原はインド北部・西チベットのラダック地方を旅しました。空と大地、人々の信仰に生きる素朴な暮らし。そこで出会った光景は、その後の創作に大きな影響を与えました。本展では、ラダック旅行以降の作品を中心にご紹介します。

会期：開催中～10月16日（日）

「ある画家の軌跡」

当館所蔵の小川原脩作品は現在、およそ700点に及びます。東京美術学校時代の秀作から、前衛的な戦前・戦後の作品、自己の心境、境遇を託したかのような動物たちの姿、そして自然と人間と動物とが交歓するアジアを舞台にした作品群まで、その時々の画家の視点や作風を特徴的に示す作品を数多く含みます。本展では、それらの代表作により、70年に及ぶ一人の画家の歩みを辿ります。

会期：10月22日（土）～12月11日（日）

■企画展示

「第58回麓彩会展」

1958年、小川原脩をはじめとする8人の発起人により創設された「麓彩会」。58回目を迎える本展では、北海道における美術の現況をもうかがい知ることのできる展覧会として、地域にゆかりが深く、かつ道内画壇を代表する作家13人の作品を小川原脩作品とともにご紹介します。

会期：開催中～10月16日（日）

「杉山留美子展 光満ちるとき」

1942年に札幌に生まれた杉山留美子は、70年代から北海道の前衛的な美術運動に早くから携わり、現代表現を展開する北海道の代表的な作家として活躍する中、2013年に亡くなりました。その間、1973年には北海道芸術新賞、75年に時計台文化会館美術大賞展・大賞候補賞、86年に北海道国際文化交流賞、そして2008年には札幌芸術賞を受賞しています。

小川原脩とは1983年の夏、約2週間にわたりインド北部のチベット地域・ラダックを共に訪れています。二人の表現方法は異なるものの、東洋への関心、自然界すべてのものに命の尊さをみる仏教的な世界観は、それぞれの画業の展開の上で、大きな転機をもたらしています。本展では杉山留美子作品の中から、曼荼羅をテーマとした1970年代、色彩豊かな表現にうつる80～90年代、そして晩年の「光」を意識した作品を紹介することで、具象・抽象などの見方の違いはあれども、その根底には小川原脩が展開した絵画表現とも相通じるもの、絵画の無限にひろがる可能性を感じ得る展覧会となることを願っています。

会期：10月22日（土）～12月11日（日）

アート・イベントのお知らせ

■アート・トーク

「画家・杉山留美子を語る」（仮）

講師：小室治夫氏（杉山留美子基金代表／JRタワーARTBOXディレクター）

日時：10月22日（土）10：00～ 会場：展示室

■土曜サロン

ミュージアム・シネマ「オルフェ」

日時：10月15日（土）14時～15時

お話し：柴 勤（当館館長） 会場：当館映像ルーム 聴講無料



小川原脩記念美術館 倶知安風土館

☎ 21-4141

☎ 22-6631

開館時間は9時～17時

（入館は16時30分）

10月の休館日

4日、11日、17日～21日、25日

美術館から

公民館の階段手前に立っている彫刻「慈愛」。お気づきでしたか。1メートル30センチくらいのブロンズ像が、白い台座の上で伸びやかにそそり立っています。健康的な若い母親の肩に担がれた愛らしい幼子、二人の表情といい温かみに溢れた母子像です。作者は本田明二。戦後の北海道を代表する彫刻家です。小川原脩の8歳年下ですが、全道展ではともに道内の美術を牽引してきた仲間でした。一見こわもてで無骨そうですが、その実、心根（こころね）は限りなく優しい芸術家。長髪で面長の風貌は、何やら小川原作品の「馬」にそっくりとの声も。ちなみに、溪流釣りの腕前は玄人はだしで、この後志へは何度も足を運んでいます。

館長 柴 勤

「海と山と田園とーミュージアムロード情報ー」

【クローズアップ】西村計雄記念美術館 開館17周年記念展「西村計雄・山岸正巳 それぞれの道」

1951年から約40年にわたりパリを拠点に画家として生きた西村計雄。地域の人々に愛され、ふるさとで画家として生きた山岸正巳。深い交流を持ちながらも、それぞれの道を歩んだ二人の画家の作品を紹介します。会期：10月15日（土）～平成29年3月12日（日）

■西村計雄記念美術館 ☎ 0135-71-2525

※10月14日（金）まで施設改修のため臨時休館

■木田金次郎美術館 ☎ 0135-63-2221

■有島記念館 ☎ 0136-44-3245

■荒井記念美術館 ☎ 0135-63-1111

感動一点 の場

『無題』

1975 年 小川原 脩 画



どんよりとした鈍色の秋空、ひと雨ごとに寒くなる季節である。青く縁取られた家々の屋根は、小川原脩が暮らした、そして今私たちが暮らす倶知安の街並みだろう。ずっと地平に線が引かれ、手前には犬が一匹、寝そべっている。

1970 年代の中頃、この時代の作品には、犬がよく登場する。無数の犬が群れとなり、怒りや悲しみ、諦めなどの表情を見せる作品が多いのだが、それに比べ、この犬の表情はどうだろう。全身から力が抜けた格好と相まって、元気がないのか心配になるが、どこかおどけた様子もある。

まもなく雪の季節が訪れる山あいのマチ。冬支度に追われる我々人間を、「忙しないね」と眺めているのかもしれない。余計なモノが描かれていない画面、シンプルに構成が小川原らしい一点である。

文：沼田 絵美（小川原脩記念美術館 学芸員）

一町の木

空気は澄みわたり、薄い雲が流れる青空の下には山頂が色づき始めた羊蹄山。蒸し暑い夏を過ごした心身に、秋は清涼剤である。しかも北海道の秋はほんとうにスケールが大きい。一切合財を包み込む感じだ。

さて、秋と言えば紅葉。この地域の紅葉はとても美しい。中でも町木であるイタヤカエデ（イタヤと略す）が添える色彩はことのほか見事だ。実は、イタヤは葉の形や紅葉の色合いにバラツキが大きい。典型的なイタヤは赤褐色に紅葉するのに対し、アカイタヤは輝くばかりの黄色になる。紅葉から見れば名前が逆じゃないかと感ずるかもしれないが、新芽を包む葉鞘が赤いことからこの名がついている。このアカイタヤのレモンイエローが羊蹄山やニセコ山系の紅葉に彩を添える。

ところで、このイタヤの材はとても優れている。樹木の材質は種で異なり、硬い材は概してもろく、粘る材は軟らかさを併せ持つものだが、イタヤの材は硬い上に良く粘る。だからこそスキーの板材として使われた。さらに白くてツヤがあり、とても上品なので家具材としても優れる。加えて最高級の木炭にもなる。燃やした際にニオイがでないので、室内で使用しても気分が悪くならない。高級料亭の客室で使われる所以だ。まだある。早春に採取した樹液は甘く、かつては楓糖（ふうとう）と称する砂糖が生産されたが、そのまま飲用してもおいしいなど、優れた点を上げればキリがない。それぞれの樹種は、皆それぞれの長所を持つものだが、こんなにたくさんの長所を併せ持つ樹は他に無いだろう。このような木がこの地域の秋を彩るのである。見事な木を町木としていると思う。

文：岡崎 毅（倶知安風土館館長）

ふる探訪 さと



▲明るい黄色がアカイタヤの紅葉
撮影村上尚美さん（心和主宰）

風土館講座のお知らせ

「資料のデジタル化講座」

近年多くの博物館でデジタル技術の導入が進められています。資料の保存と情報の発信の両立が主な目的ですが、あらゆる情報の集約・体系化も可能にし、住民にとって地域の情報が身近な存在になります。今回、北海道の図書館や文学館へのデジタル技術の導入推進に深く関わっている新谷保人さん（京極町湧学館副館長）から、デジタル技術についてお話をさせていただきます。利用についての具体的な提案もあります。参加費：無料（展示見学をする場合は1人100円必要です）。

1 回目 10 月 16 日（日）資料の保存と情報公開の技術 2 回目 11 月 5 日（土）倶知安出身の作家とその作品の取り扱い
3 回目 12 月 3 日（土）「山麓ウィキペディア」創設試案 ※3 回全て時間は 15 時～16 時